

久光公上京日録

下上
合卷

文久三年癸亥九月上京日錄卷上

至四年甲子正月廿九日

源久光自記四十七歲

首途ハ九月六日巳上刻諸事如例

源久光日記

小 九月十二日丙辰晴天 霜降九月中明六時六分

一 今般上京ノ 勅命ヲ蒙リ今日巳上刻出城、如例処々小

休ニテ日入過苗代川到着、踊例ノ如シ、

十三日丁巳晴昼過木場茶屋ヨリ雨降

一 朝六ツ半時苗代川立八半時分向田エ着、

一幕府蒸氣船拝借相濟豊後鶴崎エ廻船ノ由、江戸留守居

新納嘉藤次着ニテ届申出ル、

十四日戊午晴昼過陰

一 朝六時向田立朝露深シ、夕七時阿久根へ着、

九月十五日己未陰

一 朝五ツ時阿久根立、八ツ前出水着、直ニ早鐘ヲ鳴シ勢

揃ヲナス、四分時計ニ集ル、

十六日庚申陰米之津ニテ細雨降貫峠ニテモ同断

一 暁七ツ時出水立、暮六ツ前肥後国佐敷へ着、今夜ヨリ

少々風邪氣也、

十七日辛酉晴天

一 朝六ツ前佐敷立、朝霧深シ日入過八代へ着、今晚ヨリ
風邪氣発熱有、

十八日壬戌晴天

一 朝六ツ時八代立、日入時分川尻着、今晚ハ随分快方、

十九日癸亥晴天

一 朝六ツ時川尻立、熊本入口休ノ処ニテ江戸当月三日立

ノ飛脚来ル、何モ無異事国主ノ使者来ル、七ツ前大津

へ着、

二十日甲子晴

一 朝六ツ半時大津立、八ツ時分内之牧へ着、

二十一日乙丑陰

一 朝六ツ時内之牧立、暮前豊後国久住^{クジツ}へ着、

二十二日丙寅陰時々細雨

一 朝六ツ時久住立、夕七ツ過野津原着、

二十三日丁卯雨 今朝月代ツル

一 朝五ツ前野津原立、八ツ過鶴崎エ着、鶴崎ヨリ乗船之

賦之処、湊口不宜佐賀関之方宜キ由、故ニ鶴崎へ逗留

スベキ之旨申出ル、

廿四日戌辰陰晴西北風強ク寒シ

一鶴崎滞留、

廿五日己巳快晴寒シ

一前日ニ同シ、

廿六日庚午陰西風強シ

一朝五ツ時鶴崎立、八ツ過佐賀関着、今夜殊ニ寒シ、

廿七日辛未晴西北風吹 立冬十月節明六時

一朝四ツ過幕府拜借蒸氣船鯉魚門乗船類船都合六艘幕府拜借

給二艘順道丸鯉魚門越前船一艘筑前船一艘長崎船一艘今般買入船一艘

七ツ前出船、廿八日暁八ツ半時分芸州御手洗へ碇泊、

廿八日壬申陰

一朝六ツ過御手洗出船、昼九ツ半前備前牛島へ碇泊、

廿九日癸酉陰

一朝六ツ過牛島出船、暮前撰津兵庫着、京師ヨリ小松帯

刀迎トシテ来リ、彼方委細申出ル、大阪へ浪士等混雜

之義有之故山崎通ニ相定ル、併未表向ハ申渡サズ、

一高崎猪太郎(五六)、中川宮ノ御内命ニテ土州へ渡海ノコト、

大 十月朔日甲戌朝陰午時雨後晴

一朝四ツ時兵庫立、七ツ前西ノ宮着、今日山崎通行ノ旨

申渡ス、

二日乙亥晴天寒シ

一朝六ツ半時西之宮立、七ツ時芥川着、

一前夜高崎(正風)左太郎・吉井中助来リ、大阪之形勢等申出ル、(実策)

三日丙子陰晴寒シ

一朝六ツ前芥川立、伏見街道ヲ過、昼八ツ過着京、二本

松邸ニ滞留、実ハ長州人異変ヲ生ズルモ難計模様ニ付、(利通)

島津主殿、伊集院平治、大久保一蔵、再三之願ニ依リ

前夜九ツ時芥川立、微行シテ鳥羽通ヨリ鳥丸通ニ出、

朝五ツ時分二本松邸ニ着ス、

一今日中川宮ノ命ノ由ニテ藤井良藏申出ルニハ、明日陽(近)

明殿へ参殿、夫ヨリ参内 天氣奉伺可然之由也、予考ル(應)

ニ無位無官ノ者命ナキニ参内甚恐アリ、外ノ大名ニ準

セス、且官位叙任ノ御内命モ承知セリ、是以當時ノ形勢

公平ノ御処置ニ非ルヲ以、明日小松帶刀ヲ以其旨宮并近衛家へ申上ル賦也、

十月四日丁丑晴天

一先日ヨリノ風邪氣未快カラザルヲ以表向家老川上式部ヲ以伝奏野宮宰相殿宅へ右之旨申断リ快氣ノ上參殿天氣可奉伺之由申上ル、

一 小松帶刀・中川宮并近衛家へ參殿、昨日之趣申上ル、依テ明日朝議アルベキ間二条家・正親町三条家へモ右ノ旨可申上由命アリ、故ニ藤井良藏ヲ以両家へ右之趣申上ル、

一 諸家ヨリ使者来ル、品物等贈ラル、口上迄ノ所モアリ、十月五日戊寅陰

一 小松・藤井ノ二人正親町三条家・二条家へ拜謁、昨日ノ趣言上ノ所今日朝議アルベキノ命アル由、一 諸家ノ使者前日ニ同シ、

六日己卯雨漸温暖

一 昨日ノ朝議是非官位命セラルノ決議ナルヨシ宮ヨリ小

松ヲ召サレ仰聞ラル、然レトモ達テ辞シ奉ル旨高崎左太郎ヲ以テ陽明家へ申上、先御許容アリ諸家使者前日同断

七日庚辰晴陰昨日ニ同シ

一 今日一橋卿(慶喜)・越春嶽兄召サル、ノ朝議決スルノ由〇十津川処置ノコトニ因テ朝使二人遣サルニ付、此方ヨリモ兩人計差添ベキノ命アリ、村山(松徳)齋助・三島(彌齋)弥兵衛・志々目献吉ヲ遣スコト諸家使者前日同断

八日辛巳晴陰昨日ニ同シ

一 一橋卿御召ノ旨仰出サレタルニヨリ、新納嘉藤二・吉井中助ヲ江戸ニ下向セシメ、此方ヨリモ上京ヲ促シ且大樹公ニモ御英断ヲ以テ御手輕ノ処ニテ御上洛有レ之候ハ、尚可レ然旨ヲモ申上ル、

一 越前へモ書翰ヲ遣シ上京ヲ促ス、一夜五ツ過左大将卿ヨリ御書ヲ賜フ、明日尾張前大納言(近衛忠房)參殿ノ筈、就テ小松へ面会被致度トノ事ニ而候間已刻前小松參殿可致旨ナリ、御受申上置候事、

十月九日壬午快晴少々寒冷

一 国許へノ飛脚立、

一 小松陽明家へ参殿尾張前重相へ拜謁、サシテ要用ニアラズ、

十日癸未陰

一 近衛家ヨリ所勞御尋トシテ御重一組ヲ賜フ、

一 土産ノ品々宮井近衛家へ一藏使トシテ差出ス、

一 蹴上ケヨリ四条辺ノ固場命ゼラル、

十一日甲申陰

一 大樹公御上洛命ゼラル、朝議御決定ノ由也、

十二日乙酉陰

一 今朝江戸飛脚当月三日立来ル何モ平穩、

十三日丙戌晴天 小雪十月中今晚八時八分

十四日丁亥晴午後陰微雨

一 今日八ツ後松平紀伊守殿被参、夜入過被帰候事、家老辻将曹へモ面会、

一 今日江戸ヨリ重野厚之丞・佐土原士能勢次郎左衛門来ル、英夷戦争以後之応接相済、大体約束之次第申出ル

評議之上、猶又臨機応変無事ヲ謀ルベキ旨申付下向申付候事、

十月十五日戊子晴

一 今日四ツ時出邸、野宮宰相殿^奏伝宅へ参リ 天氣奉伺、

夫ヨリ尹宮御邸エ参殿、暫時御談話、夫ヨリ近衛家へ

参殿終日相談、夜入前帰邸^{官エハ参内辭退シ奉ル趣意逐一言上セリ}、

一 於近衛家藤堂^(高橋)大学頭へ面会之事、

一 大久保一藏ヲ江戸へ遣ス、今夜発足、是大樹公上洛ヲ

促シ且夷人応接等之事ニ依而也、

一 江戸ヨリ当九日立ノ飛脚来ル、何モ平和、

十六日己丑晴天

一 高崎猪太郎土州ヨリ帰京、^(山内豊信)容藤殿上京可有之由也、

十七日庚寅陰

一 藤井良藏国許へ下向、貞姫上京迎ノ為也、

一 八ツ後、^(細川護久)長岡澄之助・^(鎌美)同良之助兄弟入来、種々談話、

夜入前被帰候事、

一 ^(越前)松平春嶽殿上京、今夜大津泊ニ付使トシテ小松帶刀差

遣候事、

一但馬生野銀山一揆ノ告アリ、因テ探索ノ者ヲ出ス、

十月十八日辛卯晴天

一松平下野守殿筑前(黒田慶賢) 上京、今夜伏見泊ニ付使高崎左太郎

差遣候事、

一越前使者酒井十之丞来ル、昨日小松ヲ遣ノ礼ナリ、暫午後

時面会ス、

十九日壬辰晴夕微雨

一辰刻出邸、徳大寺家(内大臣公純)・二条家(右大臣宗敬)・正親町三条家エ参殿正三

八留 夫ヨリ春嶽殿旅亭六条学林エ見舞、夜六ツ半帰邸、

二十日癸巳陰

一巳刻近衛家エ参殿、御参内前拜謁、直ニ御参内御帰館

迄奉待申刻頃御帰館、尹宮(講奏代)・正親町三条大納言(実徳)・阿野上同

宰相来会、種々御談話、酉半刻退出、

一先月廿九日国元立之飛脚来ル、何モ平和、

一久留米へ書状遣ス、彼藩士不破左門内願之趣ニ因テ也、

一土州へ書状遣ス、容堂殿上京催促ノ為也、

十月廿一日甲午晴天

一巳刻過会津家老横山主税・側用人小野権之丞来ル、面

会ス、主人ヨリ品物ヲ贈ラル加賀燈一掛
蠟燭三百挺

一同時久留米番頭不破左門来ル、面会ス、是ハ主人上京

催促トシテ下向スルニ依テ也、

一申刻頃大原入道ノ許ヨリ書簡来ル、色紙ヲ贈ラル、返

礼ノ書ヲ贈ル、

一但州生野銀山一揆退散ノ由、探索ノ者ヨリ届申出ル、

一一橋卿江戸発足、来廿五日頃之由申来ル十七日立ノ
飛脚ナリ

廿二日乙未陰晴

一午後筑前家老黒田山城来ル、面会ス、今度下野守殿長

州路通行等之義ニ付 朝廷御疑有之申開キ等イタシ候

比方ヨリモ種々質問ス、申刻過帰ル山城ハ実ニ奸候ノ
者ト相見得候

廿三日丙申晴天

廿四日丁酉晴天

一午後会津家臣秋月悌次郎・広沢富次郎(安任)来ル、暫時面会

ス、当時彼藩中有志之者也、然トモ幕弊消失セザル心

地ス、

一 明廿五日会津旅館へ見舞ノ筈候処、酉刻頃彼方ヨリ使
来リ明日ハ参内之筈候ニ付断之段申来ル、

十月廿五日晴天戊戌

一 国元へ之飛脚立、

廿六日己亥晴天

一 已下刻会津旅館施薬院へ見舞、種々談話饗応等有之、

申下刻帰邸主人ハ随分幕弊モナキヨ、チス、

廿七日快晴庚子 大雪十一月節 夜四時五分

廿八日快晴辛丑

一 国元ヨリノ飛脚来ル、何モ平和兵庫ヨリ遣候
掃リ飛脚也

当月五日勢揃アリシ由也、

廿九日壬寅徵雨

一 已刻前陽明家ヨリ御両殿様御直書拝戴、長州流言等之

義ニ付而也、御請書進呈ス、

一同刻過御炊大夫来ル、暫時面会ス口ニマカセテ正
議ダテスル男也

十月晦日癸卯晴

廿五日立
一 江戸より大久保一蔵着廿日之由申来ル、一橋中納言殿

廿六日蒸汽船より上京之由也、

小 十一月朔日甲辰晴天

一 勤修寺宮齊範
親王天保年間子細有之庶人ニ被召成候得共、

至ニ近頃ニ御謹慎、殊ニ御学問御見識等当时ノ公卿方ニ

勝レ玉ヘル由相聞エ、高崎左太郎・井上弥八郎等推参(石見)

拜謁イタシ候処無ニ相違ニ由ニ付、先日より尹宮・近衛

御両殿様へ御還俗ノ上朝議ニ被為預候様申上置候処、

随分可宜旨承知イタシ候得共、尚又速ニ御評決被為在

候様、今朝書状ヲ以近衛家へ御催促申上候事、

勤修寺宮ハ尹宮ノ御兄ノ由也、

二日乙巳陰

一 春嶽殿より書状来ル、昨日一橋大阪へ着入城之由也、

一 伊達(宗睦)子州兄伏見泊ニ付左太郎ヲ遣ス、

三日丙午晴天今日より寒氣増ル

一 国元ヨリノ飛脚来ル、何モ平和先月廿日立
京着ノ掃飛脚也

一一橋着阪ニ付帯刀ヲ遣ス、

一 十津川エ遣ス所ノ村山等今日彼地ノ形勢等申出ル、

一 八ツ時分黒田山城来ル、面会ス、長州へ退去ノ七卿方

帰京ヲ謀ルヘキノ相談也、熟考スヘキ由返答ス、

一 筑前屋敷へ来ル四日五日六日見舞トシテ参ルヘキノ旨

申来ル、然レトモ足痛アルニヨリ断ノ旨山城へ申聞置

候事、

彼上京ハ此方ヨリス、メタルニアラス、彼ヨリ此方

へ相談アツテノコト也、故ニ此方ヨリ彼ニ見舞ニ及

ハス彼ヨリ来ラル、コソ相当ノ考ナリ、

一 巳下刻頃伊達予州着京之由也寺町大靈院旅宿、

十一月四日丁未陰

一 昨日山城ガ相談ノ旨趣、今日猪太郎ヲ以越前・宇和島

ノ両侯へ内談申遣ス、

一 今夜近衛家ヨリ御書被下、明日未刻より不図御光駕ノ

旨被仰下、

一 国元ヨリ飛脚来ル、何モ平和廿一日立也、

五日戊申晴朝微雪降

一 午時土佐藩士下元武兵衛来ル、暫時面会ス、

一 未下刻近衛前関白公(忠勝)・左大将卿御光駕、申刻尹宮ニモ御

光臨乗馬等御覽、夜四ツ時今御立御詠歌等被為在至極御満

一 今夜江戸ヨリ晦日立一左右在異人応接大略結尾ニ相成由

也、大樹公御上洛ハ未相ワカラス、

一 一橋卿大阪着船、未虚実分明ならず、来ル十五六日頃

之由ニモ相聞候、

十一月六日己酉陰

一 国元エノ飛脚立、

七日庚戌晴天時々雪フル

一 当朔日大樹公御上洛被仰出由、会津邸ヨリシラセ来ル

一 帯刀大阪より帰ル、一橋卿未着船無之由也、

八日辛亥朝薄雪已刻前より晴陰

一 未下刻頃ヨリ伊達予州殿入来、種々談話、夜五ツ前被

帰候事、

九日壬子雨昼過晴

一 四ツ過出邸、筑前中立売屋敷へ見舞吸物一ツ出ル、夫

ヨリ 尹宮様御邸下立壳御門内へ參殿移徒去ル廿九日之御移ナリ

御祝儀且先日御光駕之御礼申上ル、御吸物御料理於拍

所頂戴、夫ヨリ拝顔種々御談判有之、申刻頃御暇、夫よ

り陽明殿へ參上御光駕御礼申上直ニ帰邸御參内御留守也、

於 尹宮様御方へ御手のし且御文庫之内拝領、

一今朝江戸五日立飛脚着、異人一条仮応接相濟由、且大

樹公御上洛有之筈未御日限相ワカラス、

十一月十日癸丑晴天

一未刻頃松平下野守殿入来、種々談話、夜五ツ過被帰候

事、

十一日甲寅晴天

一未刻頃本多主膳正殿入来、日入時分被帰候事、

十二月乙卯陰 冬至十一月中夕七時五分

一先日黒田山城申立之一条、越前・宇和島・肥後等申談

今日高猪ヲ以彼方へ返答申遣候事、

十一月十三日丙辰朝薄雪寒氣加ル

一一橋卿昨日兵庫御着船ノ由申来ル、

(有馬兼顧) 一久留米上京延引之旨申来ル、是ハ豊後日田御代官所浪

士騒乱之事ニ依而也、

一一橋着船ニ付帶刀下阪之事、

十四日丁巳晴昨日ニ同シ

一江戸六日立之飛脚来ル、平和之趣、
定式也

一明日巳半刻頃御用之義有之ニ付、參殿可致旨陽明御用

人ヨリ申来ル、

一鷹司(輔照)殿下暴論御同意ニ而御不參ノ処、左府御闕官ニ付
(二条齊敏)今ハ前右大臣

可被任旨、尹宮ヨリ猪太郎御用召ニ而被仰聞候ニ付明

日陽明家參殿趣意言上可致申上置候事、

十五日戊午晴天

一巳半刻出邸、陽明家へ參殿、午刻過拜謁イタシ候処、

極密 宸翰拝戴被 仰付、誠以恐入冥加之至筆頭ニ難

尽候、種々 御箇条ヲ以御質問之義被為在候ニ付、三

五日中午 勅答可申上旨申上持參帰邸申刻過、

一將軍上洛ノ上 御箇条ヲ以被仰聞 御旨有之、御草稿

拜見被仰付所存御尋ニ付、持帰篤ト拜見仕、是又三五

日中持参存慮可申上置候事、

一鷹殿下左府御任官、此涯先御見合之方可然旨申上候事、

一 国元晦日立之飛脚来ル、藤井良藏帰着、貞姫去ル八日

発足之旨申来ル、

一 今夜大久保一藏江戸ヨリ帰ル、

十一月十六日己未晴天同

一 容堂殿不快ニ付上京延引ノ旨申来ル、彼家来山田俊馬

へ面会ス、

十七日庚申晴天同

一 長岡澄之助・良之助方より来ル十九日廿日之間可参旨

申来ル、十九日之処ニテ答申遣候事、

十八日辛酉雪時々降

一 五ツ時分於邸中角力見物相催候処、春嶽殿・伊予守殿

下野守殿入来見物有之候処、未刻頃ヨリ二条右府公・

尹宮・近衛前関白公・徳大寺内府公・近衛左大将卿不

凶御光駕至極之御満悦ニテ夜九ツ時分御帰相成候、実

ニ未曾有之大興ニ候事但御詠歌謡舞等被成候事、

十九日壬戌陰

一 八ツ過出邸、二条家・徳大寺家へ参殿、昨日之御礼申

述置、夫より 尹宮へ参殿、暫時拜謁被仰付、夫より西

六条長岡兄弟之旅宿へ差越候途中、於至町通春嶽殿使

来、会津旅宿へ集会之事有之候ニ付可参旨承候得共、

長岡へ約束ノ事候得ハ、先彼方へ参リ帰リ掛ケ可参申

述候処、暫時ニテモ宜ク立寄呉候様頻ニ承リ、応其意引

返シ彼旅宿へ参リ候処、伊達氏ニモ来会、江戸御本丸焼

失ニ就テハ大樹公御上洛御猶予可相成ハ必定故、若其

通相成テハ 公武御一和迎モ不相整候ニ付、是非無御

構御上洛相成候様可申越所存如何ト被尋候ニ付、同意

ノ旨申述候処、所司代稻葉長門守・町奉行永井主水正(尚志)

招寄、右之相談相成、兩人共同意故永井下向ニテ其段

可申上旨決定相成、夫より酒食等出夜四ツ半過帰邸、

右次第故長岡へハ断申遣候事、

一 江戸御城御本丸二ノ丸共去ル十五日酉刻焼失候旨町使

有之、

一今夜国元二日立定式飛脚来ル、何モ無事、

十一月廿日癸亥晴

一江戸ヨリ御城焼亡之飛脚来ル、

一風邪氣ニ付仕舞不致事、

一帯刀大阪より帰ル、於兵庫一橋卿へ拜謁候由也、

一貞姫愈八日発足之飛脚来ル、

一鷹殿下左府御転任先御見合之段、昨日於尹宮致承知候事、

十一月廿一日甲子晴薄雪

一江戸城焼失ニ付各藩ヨリ人差出シ、大樹公御上洛催促

可申上旨申談、島津主殿出府申付ル、

一已刻過土佐山田俊馬来リ帰国之旨申出暫時面会、是非

容堂殿上京可被致旨再三丁寧ニ申述書状等相渡候事、

尤朝廷ヨリモ其段御沙汰相成候由也、

廿二日乙丑晴

一昨夜半ヨリ大阪出火、今日迄未鎮火ニ不相成旨申来ル、

一島津主殿江戸へ下向候事、

廿三日丙寅晴

一大阪出火ニ付大久保一藏下阪申付ル、

一今朝先日 宸翰之御請御催促陽明家ヨリ仰下サル、風

邪ニ因テ両三日ノ御猶予申上ル、

廿四日丁卯快晴午後陰

一今朝大阪焼亡巨細ノ届アリ、廿一日夜戌刻過新町橋東

詰ヨリ出火、西南風烈ク廿三日曉玉造辺迄焼亡、卯刻頃鎮火ノ由也、

一昨夜江戸十八日立之飛脚来ル、衣服制度前々通、且御

城焼失御機嫌伺等之事也、

十一月廿五日戊辰陰晴不定

一一藏大阪ヨリ帰ル、

廿六日己巳陰晴

一未刻頃伊達氏入来、暫時談話被帰候事、

一日入過柳川家老十時撰津外一人来ル、面会ス、

一先日 宸翰ノ 勅答清書今日相済、

一今日一橋卿着京、

廿七日庚午朝薄雪 小寒十二月節朝五時七分

一 江戸廿二日立ノ飛脚来ル、

廿八日辛未朝積雪後晴

一 国元十四日立ノ飛脚来ル、

廿九日壬申朝積雪

一 巳刻頃会津士手代木直右衛門・秋月悌次郎来ル、面会

ス、長州家老歎願トシテ上京ノ事ニ依而也、

一 未刻後近衛家へ参殿、先日御光臨ノ御礼且 宸翰御請

差上候、夜入前伊達伊予守ニモ参殿、亥半刻過共ニ退

出、

一 貞姫室津へ昨日着船之由、兵庫ヨリ申来ル、

一 板倉周防守^{老中}エ書状ヲ以將軍御上洛ノ催促申遣ス、江夏

喜藏持下ル、

大 十二月朔日癸酉陰

一 重野厚之丞佐土原士能勢次郎左衛門江戸廿五日立ニテ

上京、將軍上洛之儀六ヶ敷趣申出ル、

一 八ツ後出邸、一橋卿旅館東本願寺へ参り春嶽殿・伊予

守殿ニモ来会、長州家老歎願ノ儀伏見迄 朝廷ヨリ御

取次ヲ以被差出、武家ヨリ所司代家来差添趣意被 聞

食届候而可宜トノ決議相成、明日 尹宮へ此方参殿、

右之趣言上之節談合相決候、夜入時分下野守殿ニモ来

会、至極熟話ニテ五ツ過退出、四ツ過帰邸、

但一橋卿至極打解談判有之、能キ都合ト相見得候事、

二日甲戌晴天

一 四ツ時出邸 尹宮へ参殿、昨日評決之次第申上直ニ帰

邸、九ツ半前、

三日乙亥晴天

一 奈良原幸五郎、今日出立帰国之事、

四日丙子快晴漸暖気ナリ

一 今朝主殿江戸へ着^{廿八日}ノ飛脚^{廿九日立}来ル、板倉周防守エ

参り、將軍御上洛ノ催促申上ル処、先日永井主水正モ

着、京地ノ形勢詳ニ相分り候、依之十二月下旬御発途

御評決ノ旨返答ノ由也、

五日丁丑晴天昨日ニ同シ

一未刻過伊達氏入來、暫時談話、夕刻ヨリ一橋館へ會議ノ事有之可參承リ候得共、少々不快ニ付伊達氏へ相頼断申遣候事、會議趣意ハ尹宮御事 朝廷へ被對隠謀有之、離間説有之故、右御疑被為在候而ハ以外ノ事ニ付其趣一同申談建白可致トノ事ナリ、同意ノ由申遣シ帶刀差出會議承届候様申付遣候事、

六日戊寅微雨

一昨日之連署建白今日致披見、何モ存寄無之旨返答申遣置候事、

一今日午刻過ヨリ御用ニテ二条右府公ノ御邸ニ參向、尹宮・近衛御父子・徳大寺内府公ニモ御來臨、一橋中納言・松平春嶽・松平肥後守・伊達伊予守・松平下野守・稲葉長門守・予・長岡澄之助・同良之助会集、二条公ヨリ御書取拜見被仰付、將軍上洛可有之由ニハ候得共、何分延引ニ付日限相極言上有之候様被仰出度候得共、先一同所存御尋之由也、依而一同申談 朝廷ヨリ被 仰出候義ハ、先御見合被下候様、尤右 御趣意之

義ハ一同連署ヲ以關東へ申上越候様可仕旨申上、其通御聞濟ニ而候、且長州御処置所存銘々御尋ニ付兎角將軍上洛 公武御一和之基本相立候上、何分御所置可宜旨一同申述候事、右相濟酒会ニ相成夜五ツ過帰邸、
珍敷參集ニ兩賑々敷事也、

七日己卯陰

一昨日尹宮ヨリ村山下総ヲ以彼御方へ被仰遣候 宸翰御写拜見被仰付候、 御主意ハ流言離間説等之義何モ御信用無之趣也、今日返上いたし候事、

八日庚辰ヨリ十二日甲申ニ至リ風邪氣ニ付牀中ニアリ、

十三日乙酉朝薄雪 大寒十二月中今晚八時四分
一去ル十一日貞姫着京、錦街ノ邸ニ滞在、

一十一日近衛左大将卿内大臣ニ御転任左大将故ノ如シ、
一同日二条右府公左府ニ転シ関白宣下、徳大寺内府公右府ニ転セラル、

同日 一尹宮賜隨身兵仗聽帶刀、

一同日江戸朔日立定式飛脚来ル、

一同日国元廿七日立急飛脚来ル、

一今日煤払定式ノ如シ、

一將軍上洛日限早ク御取極可有旨、肥後守以下八人連署

ニテ江戸エ申遣ス去ル八日也、

十四日丙戌晴

一今日巳刻貞姫結納之儀アリ前関白ヨリ貞君ト号ヲ賜フ、

一長州家老歎願書差出ニ付、昨日一橋・春嶽・肥後守・

伊予守等参 内被 仰出御相談アリ、一同篤ト談合ノ

上可申上旨言上之由、依之今日一橋旅館ニテ會議有之

ニ付可参向ノ旨申来ル、雖然風邪未快ニ付大久保一蔵

差出シ、右ノ段申遣シ會議ノ旨趣可聞届命シ遣シケル

処、決議ノ趣ハ長州謝罪ノ趣意ニアラズシテ申開ノ趣

ナレバ、何分篤ト御評議アルベキ間使者大阪エ滞留シ

可相待トノコトノ由、此方ノ趣意ハ先帰国被命可然ノ

趣故、其段一蔵より伊予守エ申述シ処、其筋ニ決定ア

リシ由一蔵帰リ申出ル、

此方趣意ハ長ハ謝罪ニアラズ申開キナレハ、其辺只

今御詰問アリテハ事ニ因リ平穩ニハ難ク濟スルニベシ

故ニ將軍上洛迄ハ御決定無ク之方然ルヘキノ考ナリ、

一島津主殿今夕江戸ヨリ帰京九日板倉ノ返翰持来ル、廿

一日ヨリ三日迄ニ將軍御発途ノ由也、

十二月十五日丁亥陰ヤ、温暖、

一午時半出邸、錦小路邸へ至リ貞君ニ面会、舞妓ノ興ア

リ、夜五ツ時帰邸、

一永井主水正帰京ノ由也、

十六日戊子陰晴

一巳刻過大阪銀主十人来ル、暫時面会ス、

十七日己丑陰

一未刻頃結城(秀件)筑後守来ル、暫時談話、筑後ハ疊華院宮ノ

家司有志ノ者也、暴論ニモ独立シテ正議ヲナス人ト云

々、

十二月十八日庚寅晴

一今日午後貞君錦小路邸ヨリ陽明殿エ入輿道筋錦小路室

町中立売烏丸今出川通今出川御門陽明殿本御門、

一 江戸十四日立飛脚来ル、老中有馬(道麴)遠江守蒸気船ヨリ上

京ノ由ナリ、趣意不詳、

跡ニテ承候処、京摂形勢探索ノ為ト申事也、

十九日辛卯陰申刻頃ヨリ雪フル

廿日壬辰薄雪積後雨

廿一日癸巳陰寒シ夜雨

一 今日申刻ヨリ近衛家エ参殿、先日ノ御礼御祝儀等申上

大奥へ通、種々御饗応夜四ツ時分帰邸、

廿二日甲午朝薄雪陰

廿三日乙未晴天朝微雪

一 昼過ヨリ筑前邸ニ参向、春嶽殿・伊予守殿来会、種々

饗応談話詠歌等有之、夜五ツ時分帰邸、

一二条家御初先日之御拝賀アリ、

廿四日丙申晴天

一 八ツ過出邸、二条家・徳大寺家へ参殿、先日之御祝儀

申上、夫ヨリ 尹宮へ同断暫時拜謁、日入時分御暇ニ

而近衛家へ参殿、肥後守・伊予守・稻葉長門守・予四人也、夜九ツ時分帰宅近衛家ハ大奥ニテ候

一 江戸廿日立飛脚来ル、廿七日御筈途被仰出候由也、

廿五日丁酉晴天

一 今九ツ時二条御城へ集会之義、肥後守ヨリ廻達九ツ時

分来候ニ付、俄之儀故不快ノ由ニ而断申遣ス、

一 国元五日立定式飛脚来ル、何モ平和、

一同十一日立モ来ル、同断、

廿六日戊戌朝微雪午時晴昼過ヨリ大ニ雪フル 節

分

一 四ツ過出邸、近衛家桜木町御屋敷拜借ニテ参向、貞君

御入興首尾能相濟候、祝且年忘等相混帯刀・式部・主

殿(伊集院)・平治(能勢)・次郎左衛門・一藏等召呼候、就而香川景恒・

塩川文麟・日根野対山等相招キ和歌席画等有之、終日

雅興無限、夜四ツ時分帰邸近衛家諸大夫進藤式部權少輔ニモ参候事

廿七日己亥積雪 立春正月節夜五時六分

一 松平容堂殿上京、今夜伏見泊ニ付、高崎猪太郎差遣候

事、

十二月廿八日庚子晴天

一 容堂殿着京ノ由、依而青籠肴遣候事、

廿九日辛丑陰晴

一 八ツ時出邸、一橋旅館へ参向前夜彼方ヨリ申来ル暫時面会之處、

参内アルベキ旨申来ルニ付、速ニ辞シ返ル日入過掃邸、

一 長崎製鉄所借用之蒸氣船去ル二十二日兵庫出帆、廿四

日夜五ツ時分長府沖エ碇泊ノ処、彼ヨリ大砲数十発打

掛、遂ニ焼失ニ及ヒ候由、夜前兵庫小豆ヤ方ヨリシラ

セ来ル、以ノ外ノ事也、乍併私ニ曲直ヲ糺スベキニ非

スニヨリ右ノ趣一橋エ内談致置候事、

一 一橋俄ノ参内ハ元勳修寺宮御遺俗ノ朝議御相談ノ由欽

会・越・予モ参内ノ由、併予ハ所勞ニテ御断、

一 国許エ歳暮飛脚立、

一 長州辺船一条ニ付、江夏喜藏・伊藤万次郎差遣候事、

十二月晦壬寅晴

一朝議御相談之義先日ヨリ献白いたし置候処、漸今日其

通被仰出、一橋・会津・越前・伊達・土佐之五人被命候事、

一 勳修寺宮御遺俗一条直ニ親王ニ任セラルト、先四位ニ

叙セラレ人臣ノ処ニテ朝議御関係トノ二条ニ評議不一

決由、越前より伊達旅宿ニ被参、猪太郎呼寄ニテ其義

此方ハ相談有之、此方ニハ直ニ親王ニ被任候方可宜旨

答置候事、

除夜のうた

立出し秋はきのふの心おして

あはれことしもくれにける哉

折にふれたるうた

世の中さわかしきにつきて国々の武士をめされける

になほおたやかならぬさまに聞へければ

なか／＼にたえすしら波おとすなり

ますらをつとふ都大路に

とはいへど

弓筆のみち一すちになこみなは

やしまの波もしつか成へし

雪のたひ／＼ふりけれハ

故郷の空いかならんこゝのへの

ミヤこハ雪の間なく時なし

禁庭の鶴の声を聞て

久方の雲井をちかみあしたつの

声をねさめにきかぬ夜そなき

桜木町集会の時歳暮祝といふ事を

大君のふかきめくみをうくる身は

としの暮るゝもしらすそ有ける

同しく鴨川雪を

大ひらの雪のひかりのうつろひて

いよ／＼清きかも川の水

甲子 文久四年

小 正月元日癸卯朝微雪後晴

一六ツ半時起出ル髪結相済、

蓬萊

大服之茶

右差出ス内証年男着服素袍烏帽子ニ而相勤山本孫九郎新納休兵衛

雑煮 吸物 肴 暖之銚子

右差出ス、夫より入浴試筆相認、四ツ時分休

息所出座 着服不洗物半袴

蓬萊 大服之茶 式三献 長柄之銚子加

右内証年男差出ス、引続家老側役初奥向之面々目見、

夫より庭之稲荷神社参詣

盛塩 神酒

右於神前差出内証年男勤之

昼二汁五菜之料理出ス

内証年男勤之

試筆之詠歌

旅衣いくよろこひかかさねまし

はなのみやこの春をむかへて

ふく風も鳥の鳴ねも今朝よりは

春のしらへにあらたまりつゝ

出る日のひかりをそへてゆたかなる

君か代しるき今朝の雪かな

一長州船一条ニ付国元へ海江田武次(信義)・大山彦八(政美)差下候事、

一今日越前ヨリ 朝議参予被仰出候しらせ有之事、

人数一・越・会・土也、

二日甲辰晴

一蒸気船一条子細相分り候事、

去月廿二日兵庫出船、廿四日豊前田ノ浦へ夜五ツ時分

碇泊之処、長府之方十二三町計隔り候処より砲発イタ

シ候得共、船ニハ不アツラ中、併碇泊場少々相直り候処、然

処全体古船ニ而機械等損シ居候故欤、蒸気釜之処火起

り荷物之綿ニ燃付精々消方為致申候得共不相整、終ニ

焼失ニ及候由、乗組六十八人之内四十人助命外二十八

人ハ行衛不相知、多分溺死之形ニ相聞得候、乗組士官

之内大原林左衛門廿八日小倉出帆今朝京着、細詳書付

ヲ以申出候事、

公武エ御届申出候事、

一今八ツ時分出邸、一橋館エ参向尤昨日彼ノ方ヨリ申来ルニ付テ也、会・越

・予ノ三侯モ来臨帯刀・猪太郎越ノ中根鞆負モ来、種

々談論、夜四ツ半時分帰邸、

一勸修寺宮直ニ親王ニ被任候由可宜旨今日決議、来ル四

日一橋初参内ニ而言上ノ賦也、

一將軍旧臘廿七日弥御乗船之旨町飛脚より相知レタル由

一橋邸ニテ咄アリ、

正月三日乙巳晴北風吹

一国元エ飛脚立、

一江戸廿八日立之飛脚来ル、廿廿七日將軍御乗船、廿八

日品川沖御出帆之旨申来ル、

正月四日丙午陰

一国元冬廿二日立飛脚来ル、

正月五日丁未陰

一五ツ時出邸、二条家・徳大寺家・近衛家・尹宮エ參殿
年始之御祝義申上、四ツ時帰邸、

一江戸旧臘廿九日立飛脚来ル、無事、

六日戊申朝薄雪午後陰

一八ツ時分出邸、一橋邸へ参向、種々談話、四ツ過帰邸、

一昨日一橋初参予之節、公家方ヨリケ条書御相談有之候

由、右御趣意難解事有之、種々評議有之、明日此方陽

明家へ参殿之筈候ニ付、可伺旨談合イタシ置候事、翌

日参殿イタシ候処、先御取上之旨承知、其旨越・予へ

申聞置候事、

一將軍御着阪之節為御機嫌伺伊集院平治差遣候事、

七日己酉陰

一八ツ時出邸尹宮へ参殿、夫ヨリ陽明家参殿、六ツ半時

分帰邸、

一今般將軍上洛ニ付 玉座ノ下ニ被為召御丁寧御告諭之

上 宸翰御下ケ相成候様トノ趣、宮・近衛家へ極密申

上置候事、

本文ニ付実ニ恐入候得共宸翰御趣意草稿イタシ差上候事、

一此方ヲ参予人数ニ可被召加旨一橋ヨリ献言有之、右ニ

付官位被命旨陽明家ヨリ御内沙汰帶刀承知ニ付御断申

上置候事、

正月八日庚戌晴

一四ツ時出邸、土州旅館日光御里坊へ至リ越・予モ来会、八

ツ時分帰邸、

一將軍昨七日兵庫へ御着船一夜御碇泊、今日風順次第大

阪安治川口へ御廻船之旨、伊集院平治方ヨリ申来ル、

九日辛亥朝雪天

一將軍愈昨日御着阪之由也、

一八ツ前出邸、春嶽旅館二条へ参向、一・会・予ニモ来

会、家督越前守ニモ被参、種々談話、夜五ツ過帰邸

一国元旧臘二十四日立飛脚来ル、於俊痲瘡十日ヨリ発熱

面部一ツ左足一ツノ由、実ニ輕痘也、

一江戸三日立飛来ル、

十日壬子雨

一今日元勸修寺宮御還俗御達有之由、

十一日癸丑陰

一久留米家老有馬飛彈外一人来ル、面会、中務大輔殿上

京可申遣旨達之、

一勸門ヨリ御還俗之御歎トシテ御品々拝領之事、一御見

台タガヤサン高タカ時トキ絵エアリ、一御屏風一花鳥并源氏之絵、一御硯一面銅雀瓦、

一御釜一ツ、一御花入一ツ青銅銘

正月十二日甲寅陰 雨水正月中夕七時七分

十三日乙卯陰

一今日老中水野和泉守旅館エ御用ニテ一蔵参上候処、御

上洛之上二条御城へ登城御祝儀可申上旨、書付ヲ以被

仰渡候事、

一今夜四ツ時分野宮宰相伝奏ヨリ御用ニ付留守居内田仲

之助参殿之処、此方 朝議参予被仰付ニ付従四位下左

近衛権少将エ御推任叙被 仰出候旨御書付ヲ以被 仰

渡持帰申出候得共、夜分之事故明日頂戴ノ筋ナリ先度ヨリ

辞退申上候得共此節ハ推テ命セラレ候、

一 国元朔日立之急飛来ル、蒸氣船砲撃一条也、

十四日丙辰微雨

一 御推任叙承知致候ニ付仕舞掛御書付拜見、蓬萊大服之

茶差出、終テ五ツ前出邸、野宮家へ御受御礼トシテ参

上、夫ヨリ近衛家・宮様・徳大寺家・二条家へ参殿御

礼申上帰邸着服のしめ長袴野宮迄外ハ野宮家ニテ半袴ニ着替廻勤、帰着後式三

献差出、

一 午後土州旅館へ参向、越・予来会、七ツ後帰ル、

正月十五日丁巳晴

一 八ツ後ヨリ伊達伊予守殿来臨、暮前ヨリ松平容堂殿来

臨、種々談論、夜四ツ半時分被帰候事、

一 午後將軍御着京也総裁松平大和守老中酒井雅樂頭水野和泉守有馬遠江守御供之由

一 夜四ツ時分野宮卿ヨリ御用ニ而留守居罷出候処、明後

十七日参内被 仰付候旨御達有之候事、

十六日戊午陰

一 四ツ過位記口 宣致頂戴候事、

一陽明家ヨリ御家流之御衣冠拝領之事、

老の波うちそふ身にも春の日の

もれぬひかりにあふそうれしき

正月十七日己未陰午後雪降

一四ツ半時分出邸、陽明家へ参殿のしめ、九ツ時分衣冠エ

着替兩御所エ拝謁、夫より参 内鶴之間エ相扣、伝奏

衆エ相付御礼申上畢而議奏衆御逢、夫より鶴之間後休

息所へ相扣、夜入六ツ過於小御所奉拜 龍顔 天盃頂

戴、引続去秋国許戦争之為御褒賞寮之御馬杖領 修理大

断此方名代ニテ承知、畢而於虎之間黄金拾枚同断ニ付家臣エ拝領御

礼伝奏へ相付申上、又々休息所江扣居御酒頂戴五ツ時

分於小御所御下段 朝議有之一橋・春岳・伊予守・予

出席、種々談判、四ツ時分相済直ニ退出、再陽明殿へ

参上拝謁御礼申上九ツ前帰邸 参内人数一・越・予ハ参予ノ為

京後初朝議人数二条関白・徳大寺右府・尹宮・近衛前

参内也 殿下 内府公 議奏七人 伝奏二人

一元勸修寺宮御事山階宮ト御改号一乘院ノ御里坊ニ御移

十八日庚申晴

一昨日之御礼トシテ九ツ半過出邸、関白徳大寺 尹宮・

議奏七家・伝奏二家江廻勤、七ツ過帰邸、着服狩衣烏

帽子、

正月十九日辛酉晴

一四ツ半過出邸、春嶽殿旅館江参向、面会、伊達予州ニモ

来会、夫ヨリ同伴二条江登城暫時相扣居於御黒書院御

中段將軍家江拝謁御懇之上意有之、御茶御菓子御吸物

御酒御料理迄頂戴別段御酌ニテ御盃頂戴、畢而於蘇鉄

之間老中江相付御礼申述暮時分帰ル、尤一橋君御亭主

振ニテ候 着服のしめ

一岸良七之丞・奈良原幸五郎着京候事、七八日臘廿八日

国立立、幸ハ正月四日立ニテ候、七八大島一条之相談

旁也、幸ハ長州砲撃一条也、

正月廿日壬戌雨

一九ツ時出邸、元勸修寺宮御帰宅 一乘院 御里坊 江参殿のしめ

り服替ニ而土州旅館江参向、夜五ツ過帰邸 予州モ来

一年頭歳暮飛脚国元ヨリ到着、何モ無事、

正月廿一日癸亥陰

一今日未刻將軍參 内、予腰痛ニヨリ不參御都合向キ

宜キノ由也夜子刻頃二条へ還御ノ由也、

一右大臣ニ御転任ノ由、

一大原前左衛門督ヨリ狩衣烏帽子ヲ贈ラル、
(重徳)

廿二日甲子雨

一巳刻中根鞞負来ル、昨日將軍ノ參 内御都合別而宜ク

御宸翰ヲ以御丁寧ノ御告諭ニヨリ感泣ノ至ノ旨、春嶽

殿ヨリ申越サル、

一未刻頃二条江登城スベキノ旨、御目付ヨリ申来ルニ付

出門越前邸へ參候処、春嶽殿ニハ登城ノ跡故直ニ登城、

於蘇鉄之間御吸物御酒頂戴、夫より御休息所へ被為召

宸翰拜見被仰付、以来存付之義無遠慮可申上意御受申

上退席、老中へ相付右御礼申述歸邸五ツ前春嶽殿・伊予着
守殿一所ニ而候

服のしめ半袴、

一陽明家ヨリ改名イタスベキ旨関白ヨリ内達有之由承知

前殿下思召ヲ以拝領仕度段帯刀エ申付置候事、

正月廿三日乙丑朝微雪後晴陰

一未刻頃參予ニ付參 内衣冠無ニ指支ニ御酒頂戴、酉刻頃

歸邸人数一
越・予也、

廿四日丙寅晴昼過雪

一昨日於 禁中一橋より今日二条へ登城可致旨承知ニ付

午刻過登城之処、一橋ハ不快ニ而登城無之、蘇鉄間総裁

閣老へ暫時面談、申刻過退城、越・予・土ニモ登城、土ハ暴
言ハキチラシ先ニ退出以之外

ノ義ニ御
座候事

着服羽織袴、

廿五日丁卯晴朝微雪

一奈良原幸五郎今日歸国候事、

一午半刻過ヨリ山科宮御飯殿へ參上、種々御談話、夜ニ

入過歸邸、

着服肩衣袴、

一一橋・春嶽ヨリ二条登城中来候得共断申遣候事、

但昨日之一条於予不平ノ義有之故断候事、

正月廿六日戊辰晴

一前殿下ヨリ藤井良藏ヲ以今般官位被 仰付候ニ付、大

隅守ト改メ候様致承知候事、

一吉井仲助・西郷信吾・福山清藏三人大島吉之助赦免一

一条ニ付帰国申付候事、

一今夜子刻過春嶽殿書状来リ、明日五ツ時一橋ニモ登城

有之候間此方ニモ登城可致旨申来ル、しかし足痛増長

故断申遣候事、

尤表向老中ヨリモ今晚申来候得共同断、

廿七日己巳陰 啓蟄二月節昼八時八分

一今日午刻將軍參 内ノ由也、余有足痛不參、

一山科宮親王宣下御名晃 アキラ 被仰出候、依之高崎左太郎御使

ニテ高崎當時宮へ同候諸大夫格被仰付伊勢ト改 宣旨拝見被仰付候事、

一將軍從一位ニ被叙候由、

廿八日庚午快晴

一未刻出邸二条へ登城羽織袴 越・予・土ニモ參集於御用談

一所総裁松大和 酒水有 閣老談論、畢而御吸物御酒頂戴、引統於

御休息所御目見從一位被仰付候御書付、御直ニ拝見被

仰付退出、夫ヨリ一橋旅館へ參向、種々談話、夜九ツ

前帰邸、

一今日山科宮御元服無品常陸大守ニ御叙任ノ由、

廿九日辛未快晴

一大隅守ト改メ候ニ付申文可差出伝奏ヨリ承知ニ付、今

日差出候事、

從四位下行左近衛權少將大隅守

源朝臣久光自記享年四十八

御由

文久四年甲子二月朔日上京日録下

二月廿一日元治卜改元

源
久光
自記

正月十三日

從四位下行左近衛權少將兼大隅守源朝臣久光四十八歳

源朝

四月十一日

四從位上行左近衛權中將兼大隅守源朝臣久光

源久光自記

文久四甲子年二月朔日小壬申晴天午後陰

一 国元正月十六日立ノ飛脚来ル、平和也、

一 大隅守兼任セラルノ旨伝奏坊城大納言家ヨリ留守居承(俊寛)

知申出候事、

二日癸酉晴

一 四ツ時出門春嶽殿旅館ニ参向、伊予守殿ニモ入来、種

々談話、八ツ時過二条エ登城春・予モ同断、一橋殿御扣所ニ

テ総裁老中等ト評論、夜六ツ過帰邸、

○ 論談ノ事ハ去月廿七日 將軍家御参 内ノ節御直達ニ

而被仰渡、諸大名エモ拜見被 仰付候 宸翰写將軍家

御添書ヲ以諸大名エ御布告可有之ノ事也 一座同意但昨日春・橋ノ論アリ

シ由、橋ハ布告ヨロシカラス、春ハ布告セズンバアルヘカラスト

○ 横浜鎖港一条大ニ論判ス、橋老等ハ已ニ使節ヲ遣シ殊

ニ諸藩沸騰ノ患モアレハ、比度 朝議ヨリ尚又横一港

鎖スベキノ 命ヲ下シ玉フヘキ旨願ハンノコト也、予

是ニ同セス議論万般遂ニ今一往熟考スヘキノ由、老中

返答ニテコト濟候、

予ノ趣意ハ別ニ著ス故ニ略ス、春・予モ予ト同シ、

○ 長ノ御処置談判大略決シヌ、

三日甲戌陰

一 午後大隅守兼任ノ 口宣頂戴之事、

一 將軍家ヨリ御側御小納戸御使ヲ以御菓子一箱御交着一
田下總守

折ヲ賜フ時候御尋ノ由御使エ面会御礼申述ル着服肩衣袴家老ヲ以

御側御用取次土岐(朝邑)下野守エ御礼申出候事、

一夕刻松平(黒田慶實)下野守・松平紀伊守入来(淺野茂胤)筑家老黒田山城、浦上信濃、芸家老辻將曹モ来ル

夜四ツ時分被帰候事、

黒浦之両奸驕傲無礼斬首シテモヨロシキ人物可惡々

々、

二月四日乙亥快晴

一二条御城惣出仕申来候得共不快故断申出候事、

五日丙子陰午後雨

一 午時出門春嶽邸エ参向、予州モ来ル、未刻二条登城

一 橋扣所ニテ総裁老中談判、右相濟於御休息所御目見

御茶御菓子頂戴御手自御印籠拝領、夜入時分退城、夫

より陽明家エ参殿、予州モ同断、容堂モ来ル、九ツ時

分帰邸先日ノ論判任テ彼ニ從フ事可宜相考其段申出置候事

但先日菓着拝領ノ御礼老中水野エ申出候事、

右故改服ニテ登城、

一元三条初六卿ヨリ書面ヲ以 朝廷エ言上之趣有之参予

ノ人数江伝奏ヨリ相談有之候ニ付、一同申談御取揚無

之候而可然由申上候事、

六日丁丑陰晴

一 午後松平甲斐守殿入来、暫時對話ニ而被帰候事甲州官位内願ノ事

有之故也

一 波平行安刀一腰 一大幅緞子一本 一御肴一折

右 大樹公エ御内々献上 一橋公方迄差出候、

七日戊寅微雨

一 未刻出門長岡兄弟之旅宿本願寺ニ至ル、夜四ツ時分帰

邸下野守ニモ来ラル、早ク帰ラレ一橋へ参向ノ由、

一 將軍泉涌寺エ御参詣之由、

一 陽明家御内婚、今日被為整候事、

二月八日乙卯陰

一 今日四ツ時一橋邸エ参向、夫より登城、未刻ヨリ二条

関白邸エ至ルヘキノ旨昨夜春嶽ヨリ申来候得共、所勞

ニ付断申遣候事、

一未刻前伊予守一橋邸ヨリ書状ヲ以テ所勞ニテモ押テ二
条家迄ニテモ參殿イタシ候様申來候、折柄山階宮様不
図御光駕、御吸物御酒等差上暫時御談話、宮様ヨリモ
是非二条家江參殿仕候様致承知候ニ付御請申上候、未
刻過宮様御立ニ而候事、

一酉刻出門、二条関白様へ參殿、徳大寺右府公・尹宮・
山階宮・前殿下・内府公・一橋・春嶽・伊予守・容堂
・大和守・雅榮頭・遠江守集会、長州御処置決議相成
候事、

一先長之末家并家老大阪迄御呼出シ老中大小監察下阪、

左之通三条御達之筈、

去年

一八月十八日元三条初七人無故誘引之事、

一幕船ヲ抑留シ幕使ヲ暗殺之事、

一長崎ヨリ此方拝借蒸氣船砲発之事、

右御詰問且七卿可差出旨御達之由、公武御相談一決、

明日関白様ヨリ右之趣 奏聞被成 叡慮御伺 御沙汰

之趣大和守老中被召呼御達之筈之事、

一江戸先月廿九日立飛脚來ル、

二月九日庚辰晴

一未刻過会津家臣柴秀次來リ、元三条家諸大夫丹羽出雲守(正備)

江面会、彼事情承り候趣演説イタシ候事、

長州対遇當時ニ至リ不宜、禁錮之形ニ而、大ニ悔悟帰

京之念頻ニ生候趣也、

十日辛巳晴 ヒガン入

一松平肥後守五万石御加増被仰出候由、

十一日壬午陰

一国元へノ飛脚立、

一国元先月廿二日立ノ飛脚來ル、

一大樹公御内使者御小納戸朝倉播磨守ヲ以時候御尋トシ(後徳)

テ御掛物古法眼一幅御火鉢一对唐金 御肴一桶鯉五尾ヲ賜

フ、御使ニ面会御礼申述ル、別段御礼登城ニ不及旨御

使申ニ付其通承知イタシ候事着服不洗物半袴、

一長州江御達之旨有之、若承知不致時ハ征伐之兵御差向

ニ付人数差出候様トノ趣、留守居御城ヨリ御用ニテ御

達有之事、御名代紀伊中納言殿副將松平肥後守差添有

馬遠江守、

(縁須賀齊裕)

松平阿波守

(池田慶徳)

松平相摸守

(定安)

松平出羽守

細川越中守

(浅野茂勲)

松平安芸守

(池田茂政)

松平備前守

(忠勝)

小笠原大膳大夫

阿部主計

頭 脇阪淡路守

(安宅)

ニテ候事、

御書付写

松平修理大夫

此度松平大膳大夫父子江御糾問之筋有之、万一承服不

致節ハ御征伐可被遊 思召ニ付、其節ハ為討手其方人

数差出候様被 仰出候間用意可致旨 御内意被仰出候

事、

一初午ニ付屋敷内稻荷社江外方ヨリ参詣人段々有之候事

二月十二日癸未晴

一申刻過出門山階宮江参殿、先日御元服御祝儀且御成之

御礼申上ル、容堂ニモ参居暫時談話、夫ヨリ陽明家へ

御内婚之御祝儀トシテ参殿、容堂ニモ参向、夜四ツ過

帰邸、

二月十三日甲申雨 春分二月中夕七時四分

一未刻出門容堂旅館へ参向、申刻過予州モ来ル、種々談

話、夜入過伝奏来ヨリ春嶽・予州・予三人連名之状到

来、早々参 内可致旨ナリ、即帰邸服ヲ改衣冠、戌半

刻参 内、於小御所御中段国事關係之堂上御列座長ノ

御処置等御質問之義有之相濟、亥半刻頃帰邸、

一岸良七之丞・山口鉄之助、先日御達之儀ニ付今日帰国

申付候事、

十四日乙酉雨暖気

一今日將軍参 内先月廿七日 宸翰ノ御請御差出有之候

由也、

二月十五日丙戌晴

一今日二条城総出仕ニテ 宸翰并御請書布告有之候由、

一今日未刻ヨリ参予人数参 内被仰出、且其前二条城江

登城イタシ候様春嶽方ヨリ申来候得共、腰脚痛ニ付断

申遣候事、然処申刻過是非参 内可致旨伝奏ヨリ申来

候ニ付、申刻頃参 内ニモ越・予参 内有之、於小御所

御中段 大樹公御請書ノ儀ニ付種々評論有之、亥刻過
帰邸、

一肥後守京守護職被免、軍事總裁被仰付由、

一春嶽事京都守護職被仰付候由、

大藤大夫ト改ム

一国元去月廿六日立飛脚来ル、

十六日丁亥晴

一未刻頃ヨリ二条登 城、有馬遠江守ヨリ御用有之節ハ

御用部屋へ罷出候様致承知候、御吸物御酒等頂戴、大

樹公ニモ御出御酌有之、夜入過退出、其ヨリ尹宮へ参

殿四ツ時分帰邸、

二条へハ与・土モ登城、尹宮へハ一・城・予也、

一今夜海江田武次着ス、長州砲撃一条ニ付彼ヨリ国元へ

(信義)

使者差遣候由、其趣サンテ悔悟ニアラズ、依之公武へ

御届申出候上ハ尚又公裁可相待旨返答ノ由申出候事、

二月十七日戊子晴

一国元先月廿九日立来ル、

一芸家老辻將曹帰国ニ付来ル、長州御所置ニ付内意申出

候事、

十八日己丑晴晚景細雨

一午刻出門二条登 城撰海砲台等ノ絵図差出候様トノ事

故持参、水野和泉守へ相渡置候事、日入前帰邸、

十九日庚寅晴晚景細雨

廿日辛卯晴晚景陰

一今朝辰刻函書着阪之由、暮過申来ル、国元十六日出帆

ノ由、

二月廿一日壬辰晴

一四ツ後出門、林光院ニテ (島津義弘) 松齡公御画像御供養参詣、

夫ヨリ相国寺方丈ニ而宝物等見物直ニ帰ル、但着服

烏帽子狩衣、

一松方助左エ門・平田平蔵蒸気船ヨリ着京、国元去十二

(正義)

日内婚相整候由申出ル、其外無事、

一佐土原家老樺山舍人来ル、(島津忠寛) 淡路守書状ヲ遣ス、上京之

事ニ付而也、

一元治ト改元ノ由、今日二条城総出仕ニテ達シ有之候事、

廿二日癸巳晴

一二条城ヨリ御用ニ付八ツ時出門、登城於牡丹之間老中
列座水野和泉守ヨリ左之通達セラレ、

御刀美濃國兼常
御脇差延壽國村

松平修理大夫
名代松平甲斐守

年来國家之御為藩屏之任ヲ尽シ候段 御満足ニ被 思
召候、依之御差之御刀御脇差被下、弥励精可相勤候、

陣ヶ森栗毛^{六才}四寸五分 仙台 島津大隅守

年来國家之御為励精尽力致シ当節之御場合ニ至候段

御満足ニ被思召候、依之御鞍置御馬被下、愈精勤可致
候、

右相濟坊主部屋江相下リ候処、又々出席致候様御目付
ヨリ申来、於御黒書院御懇之上意有之、御手自御差ノ
御刀頂戴御礼老中江申出退城、月番水野和泉守旅館江
見舞、暮前帰邸、着服不洗物半袴、

上意振

兼々國家之為尽力致シ去八月十八日被為復正義候節、

滯京之家来共不一方周旋致シ候段、兼而申付方行届候
儀ト満足シ、依之道具遣之、

御刀備中国直次

二月廿三日甲午陰暖氣

一四ツ過函書着京之事、

一未刻過長岡兄弟入来、数刻談話、夜五ツ時分被帰候事、

一明日參 内之義大藏大輔方ヨリ廻達有之事、

廿四日乙未晴暖

一未刻過參 內衣冠於小御所談判之義有之長御所置之事也 夜亥

刻過帰邸一・越・予・筑前・芸州・藤堂・長岡兄弟也、

二月廿五日丙申陰暖

一長州末家一人并吉川監物長州家老一人御用ニ付、大阪

迄罷出候様 朝廷ヨリ執奏勅修寺家 ヲ以御達幕府ヨリ御

達有之候事、

廿六日丁酉雨温暖甚シ

一九ツ過出門、二条登 城御用部屋へ通ル、存寄書付ヲ

以申出候様承知、日入前帰邸諸大名総出仕ニテ同様御達有之候

廿七日戊戌晴暖和晚陰

大 三月朔日辛丑晴陰

廿八日己亥陰晚雨 清明三月節夜五時七分

一四ツ後松平紀伊守殿入来、明日免足ニ付暇乞之為也、

暫時談話被帰候事、

一七ツ後予州入来、数刻談話、夜五ツ過被帰候事、

二月廿九日庚子晴

一先日長州エ御達之儀彼留守居ヨリ京師マテ被召呼度、

無左時ハ悔悟ニ不至旨筑前エ申込メタルニヨリ、筑ヨ

リ 朝廷エ言上故ニ 朝議相変シ、此方所存二条殿下

ヨリ内命御尋ニ付、此方ハ初ヨリ京師エ被召儀至当ト

ハ存候得共、 朝廷御動揺公卿方御恐怖生スルハ案中

故、大阪迄ト申出候、御動揺等無之御見留モ御座候ハ

、京エ被召候而可宜、若御恐怖被為在候ハ、不可

然旨御返答申出置候事、

右ニ付 朝議紛々ト相成、公武ヨリ御達有之候儀ヲ、

先暫ク扣居候様、長之留守居ヘ 公武共ニ被達候由、

大息無極次第筆頭ニ難尽候事、

一四ツ後出門一橋邸ニ至ル、存寄申上候様、廿六日承知

イタシ候得共、当座先無之旨申出置候事、尤可申事ハ

種々有之候得共、忌諱ヲ犯シ嫌疑ニ触レ候而却テ不被

行事ニ付先不申出候、

一凶書参 内被 仰付修理大夫先度御馬拝領之御礼使也

烏帽子
直垂

二日壬寅陰

一今日未刻参予ニ付参 内之儀、昨日大藏大輔ヨリ廻達

申来候得共、痛所有之ニ付不参、長ノ御処置御評議ノ

由、例ノ紛々ニテ遂ニ不一決ノ旨、翌朝伊予守ヨリ承

候歎息々々、

三日癸卯晴天

一国元先月十七日飛脚来ル、無事、

四日甲辰雨

一今日モ参予ニ付参 内之義大藏大輔ヨリ廻達有之候得

共、痛所ニ付不参今日モ一橋不参ニテ決議ナラサル由、

五日乙巳朝雨晚陰

一將軍御推任叙御礼御參 内ニ付供奉之儀申来リ候得共
痛所ニ付不參、但將軍ニハ御所勞ニテ御延引ノ由、参
子人数參内申来候得共不參、

一長ハ大阪迄ノ処ニ御評決之由、

六日丙午晴天又少々冷氣

一腰痛痛頻ニ相発參予モ不參勝ニテ、恐入候ニ付參予御
免帰国之御暇被成下度、左候ハ、国元温泉へ入湯加療

養全快ノ上御用ノ節ハ上京可仕、尤參予御断申上候ニ
付而ハ官位迄モ御免被仰付被下度旨之願書草稿、帶刀

ヲ以尹宮・陽明家へ御内見ニ入候処、御両所共ニ御驚駭
ニテ早速宮・陽明家ニ御出ニテ早々參殿可致、若不參

候ハ、押而可被為成旨猪太郎ヲ以被仰下候ニ付、申刻
頃陽明家ニ參殿、御父子様并尹宮御同座ニテ種々御論

判、是非今暫滯京致候様被仰聞候得共、永々滯京仕候
テハ疲弊ハ勿論段々故障筋等申立候処、終ニ四月中迄

五月中旬迄ハ見合候様トノ御事ニテ、先其通御請申上

候事、戌刻頃帰邸、

内実ハ痛所モ勿論ナカラ 公武共御因循無極連モ十
分ノ事モ難為被整御模様、只無益ニ滯留イタシ候而
ハ疲弊相重リ後來ノ尽力モ難出来ハ必定ニ付、先此

度ハ引取候方可然且御暇申出候ハ、堂上之処又御
模様モ可被為替欵トノ内評ニテ如右申出候、

一陽明家糸桜満開少過候程ニテ別而見事ニ候、

三月七日丁未晴

一近衛家桜木御邸ニ申下刻參殿、予州モ来ル、夜四ツ半

過帰邸、

一將軍參 内有之由但御官御昇進御礼之由也、

八日戊申陰微雨

一国元先月廿三日立飛脚来ル、

一江戸当月二日立飛脚来ル、

共ニ平和、

九日己酉晴

一將軍御參 内舞楽御拝見ニ付諸大名ニモ拝見被 仰付

辰刻参内衣冠、午刻頃於紫宸殿前舞楽有之、折節御階

下ノ桜モ満開也、申刻頃終ル、於鶴之間酒饌ヲ賜フ、

暮景退出、

阿波中将 (鎌須賀) 齊裕 (松平) 慶永 越前中将 (松平) 頼隆 後 伊達侍従 (宗城) 彦根少将 津侍従

筑前侍従 (黒田) 慶賢 (松平) 頼隆 高松少将 (板倉) 勝成 (松平) 定教 桑名侍従 (本莊) 宗秀 忠精

酒井侍従 (忠統) 河越侍従 (松平) 直克 宮津侍従 (池田) 茂政 (松平) 忠誠 水野侍従 (道純)

柳原四位 (政敬) 忍侍従 (松平) 忠誠 備前侍従 (池田) 茂政 有馬侍従 (道純) 予

以下五位二十余人

舞人の袖ふきかへす春風に御階の花も香に匂ひつ

笛竹のしらへも空に霞みつゝのとかなるへき御代の春

哉

おもひきや御階の春の花のかを老のたもとにうつすへ

しとへ

三月十日庚戌晴

一江戸朔日立飛脚来ル、無事、

十一日辛亥晴

一一昨日之御礼トシテ二条殿下并議伝両役衆エ廻勤未刻

出門申刻帰ル、着服のしめ半袴、

一國元へノ飛脚立、

十二日壬子晴

一午後出門二条へ登 城於御用部屋御用談有之申刻頃帰

邸 予州・長岡兄弟モ登城、一橋 第一英夷ミニストル江長之 總裁・閣老・大目付等ナリ、

事件談判ニ付テ也、其外少々アリ、

十三日癸丑晴暖甚シ

一吉井中助・山口鉄之助等上京之事、

一松方助左衛門今日出足帰国之事、

三月十五日乙卯朝雨陰 穀雨三月中明六時二分、

一朝議参予御免之義、先日一橋ヨリ関白殿下へ願被置候 十四日ノ事也 九日

処、願ノ通今日御免被 仰付候、尤御用ノ節ハ参 内

仕候様トノ事ニ候事、

十六日丙辰晴平和

一申刻頃ヨリ伊達予州入来、夜戌刻被帰候事、

一國是ノ儀所存有之候ハ、来ル廿一日限申出候様松平

大和守ヨリ被達候事、

十七日丁巳雨

一 巳刻頃ヨリ出門、一橋館へ参向、与州モ同断、参子御免被仰出候ニ付、幕府御用部屋へ罷出候義モ御免之願申出置候事、午半刻頃帰邸、

十八日戊午微雨

一 四ツ後久留米家老岸相模来ル、主人上京ノ事ニ付而也、
一 引統越前家老狛山城来ル、守護職御断之事ニ付而也、
一 国元先月廿九日立来ル、

十九日己未陰

一 四ツ半時分出門、陽明殿へ尾張前大納言へ面会いたし夫ヨリ於御裏御殿内府公へ拝謁、終日御談話、夜入五ツ前帰邸、

尾ハ参 内ニ依陽明殿ニ而差替之為也、暫時ノ間面会ス、

一 一橋京阪守衛総督内願且諸大名都而御暇此方計被差止候トノ儀、二条殿下ヨリ猪太郎へ御引合此方見込御尋ニ付、一橋儀ハ存寄無之諸大名御暇ニ候ハ、此方モ同様被 仰付度、無左候へハ、不公平ノ御処置ト相成

可申旨申出置候事、

但橋之策略不十分ノ儀、与州ニモ不平、予モ同断、

三月廿日庚申雨

一 先日御用部屋罷通候義御断之一件、今日一橋ヨリ書状ヲ以是迄通可相心得旨、伊達連名ニテ申来リ候故、当座ハ口上ニテ御受申述、乍併又々御断申出候含伊達ニモ相談申遣候処、同意候由返答有之候事、

一 国是申出候様承知候得共、天朝御尊敬武備充実ノ外見込無之旨申出候事、

三月廿一日辛酉陰

一 申刻頃予州来臨、暫時談話被帰候事、

二十二日壬戌晴

一 午半刻出門、常陸宮へ参殿、暫時御談話、夫ヨリ陽明殿へ参上、尹宮予州ニモ御同座御談判、夜五ツ半帰邸、
一 御用部屋出ノ義、帯刀ヲ以一橋へ再御断申出置候事、
二十三日癸亥陰晚雨
二十四日甲子雨

一 国元十日立飛脚来ル、

一本田弥右エ門十二日立ニテ国元ヨリ来ル、
(銅鑼)

一一橋中納言後見御免 禁裏御守衛総督撰海守禦指揮被

仰付候事、但内願ニ依テ也、

一 將軍家御参 内之由也、

二十五日乙丑雨

一 有馬中務大輔今日着京之由、

一 長岡澄之助今日発足帰国之由、但良之助ハ未在京之事、
(細川護美)

三月廿六日丙寅晴 八十八夜

一夜六ツ過常陸宮被為成種々御談話、九ツ時分御帰之事

阿州・筑前御暇一条、此方御暇一条、尹宮・前関白様

等之御事也、

一 老中有馬遠江守江戸へ帰府、

二十七日丁卯晴

一 江戸十九日立飛脚来ル、

廿八日戊辰晴 暁雷一声大雨未後暫時雨降

一 午後後尹宮へ参殿、種々御話、夜入時分帰邸
予州ニモ暫時
参上、

一 大樹公二条関白邸へ御出之事、

一 交御看一折 一八丈島二反、

右大樹公ヨリ御使御小納戸塩谷捨五郎(正睦)入来時候、御尋

トシテ拝領御礼ハ別段申上候ニ不及段モ承知之事、

廿九日己巳晴

一 大樹公御参 内ノ由、

三月晦日庚午晴天

立夏四月節 昼八時七分

一 未刻出門、越邸へ参向、一橋・予州ニモ集会、大蔵大輔

守護職御断一条且撰海守禦等ノ義談判、申刻頃一橋ハ

被帰候、夜入過長岡良之助来り談論教刻、亥刻過帰邸

越・子・良・子帰
国相談ニテ候

一 未半刻頃地震、

小 四月朔日辛未晴冷

日食五分朝五時一分右ノ方ヨリカケハジメ、五時五分
右ト下ノ間ニ甚シク、四時下ノ左ニ終ル

一 国元先月十八日立飛脚来ル、

二月壬申晴冷

一七ツ時分ヨリ予州并長岡良之助入来、種々談論、夜四ツ前被帰候事、尤帰国之義来ル五日二条殿下へ参殿可申上旨申談候事、

但越ハ守護職御免一条不相分候ニ付先相除、

四月三日癸酉晴

一帰国願之儀二条殿下へ御集会相願三人同道可申上談置

両宮近衛岡公徳大寺

候得共、公用ニモ無之候ニ付、銘々江参殿可然旨予州

ヨリ相談申来候ニ付、同意ノ旨返答イタシ候事、

四月甲戌晴

一帰国一条、二条・近衛之両邸へハ長岡・山階宮へハ与州・尹宮・徳大寺へハ此方参殿之筋取究両家へ申置置候事、

一筑前昨日帰国之事、

一越前守護職御免、会津再守護職被仰付但軍事総裁ハ御免、

五日乙亥陰午後雨終夜

一午後徳大寺・尹宮へ参殿、帰国御暇之義申上置候事、

尤 朝廷へ被仰出候様願出之事、

六日丙子晴

一午半刻出門、長岡旅館へ参向、与州モ来会、種々談話夜入帰邸、

七日丁丑雨

一帰国之供人数申渡候事、

八日戊寅晴

一今日御暇被 仰付候事、

一午半刻出門、尹宮へ参殿、御暇被仰出候御礼申上、夫

ヨリ常陸宮へ参殿、種々御談話、夜入時分帰邸、

御書付写

島津大隅守

永々滞京苦勞被 思召候間、今度御暇被下候、但島津凶書 残置非常之節 禁闕警衛有之候様 御沙汰候事

九日己卯陰冷

一從夕刻有馬中務大輔入来、種々談話、夜四ツ時分被帰候事、

一伊予守今日左少将へ 御推任ノ由、

十日庚辰晴

推任、長岡ハ兄細川越中守本從四位下少將へ從四位上、

一夕刻出門、陽明家へ參殿、大藏大輔・中務大輔・伊予

島津大隅守

守・良之助モ集會於御裏御殿、種々談論、夜九ツ時分

一昨年来格別周旋公武御一和之基本ヲ開、其功勞拔群

帰邸、

且昨秋以来長々滯京參予等苦勞被 思食、依之從四位

一江戸二日立飛來ル 一國元先月廿四日立來ル、

上左近衛權中將推任叙被 宣下事、

十一日辛巳晴冷

四月十二日壬辛晴午カ

一伊達予州今日発足歸國之事

一國元先月廿九日立飛脚來ル、

一巳半刻出門、參 內衣冠於鶴之間伝奏衆坊城大納言・飛鳥井中納言・野宮中納言

一松平備前守今日発足之事、

江謁シ、 天氣相伺、夫ヨリ休息所へ扣居松平大藏大輔・松平備前守・長岡良之助

十三日癸未晴冷

岡良之助 夕刻於小御所奉拜、

十四日甲申晴冷

龍顔 天盃頂戴畢テ、於虎之間伝奏衆御逢御品御菓子老箱三本入

一巳刻出門、一橋邸へ參向、暇乞申述酒肴被差出候、午

白晒 拜領、且從四位上左近衛權中將へ 御推任叙被

半刻頃帰邸、

宣下候旨御達、越引統於鶴之間・備一同旁之御礼申上退出、陽明家

一申刻出門、越前邸へ參向、暇乞申述酒肴被差出種々談

へ參殿、兩御所へ拜謁御礼申上、夫ヨリ兩宮様・殿下・

話後來ノ処約定、戌刻頃帰邸、

徳大寺議奏伝奏衆へ廻勤、夜九ツ半時分帰邸議奏ハ正親町三条大納言

一諸方ヨリ餞別品來ル、

言・柳原中納言・正親町大納言・広橋宰相・阿部宰相・久世宰相・六条宰相以上七人

十五日乙酉晴

越ハ正四位上參議、備ハ從四位上左近衛權少將江 御

一巳刻首途名代申付候事、

一長岡良之助、今日発足之事、

一未刻出門、二条殿下・徳大寺・尹宮江參殿、御暇乞申上候事、

二条へ拜謁、徳大寺へ御所労故不拜謁、尹宮へ拜謁御酒等頂戴之事

一巳刻頃中川修理大夫入来、暫時談話被帰候事、

四月十六日丙戌晴

小満四月中明六時五分

一未刻出門、常陸宮へ參殿、御留守故御暇乞御機嫌伺取

次へ申置、夫ヨリ桜木へ參殿前殿下へ拜謁、段々拝領

物有之、日入過退去、御本殿へ参上内府公へ拜謁、於

御裏御殿種々御談話、拝領物有之、夜四ツ過歸邸、

一奈良原幸五郎国元ヨリ来ル、サンテ無事十日立小蝶丸より着船

一大樹公へ内々進上、唐錦一本・鎗之穂十本・御馬一疋

・焼物菓細工二箱・御着一折

十七日丁亥晴

一日州細島一往御預地幕府ヨリ被仰渡候事、

一今日常陸宮ヨリ參殿仕候様御引合有之候得共、混雜ニ

付御断申上候事、

一大樹公ヨリ御小納戸宇田川ヲ以テ御餞別トシテ御脇差

一腰石州直綱無銘代金三十枚・御三所物水仙細工・御袴地三反・御菓子

一箱拝領之事、

十八日戊子雨

一六ツ半時過発足、稻荷社内愛染院小休、伏見本亭休、

夫ヨリ川下り、七ツ過大阪邸へ着之事、

十九日己丑晴

一大阪滞在、

二十日庚寅晴

一滞阪、

一去ル十七日尾張前大納言殿初官位昇進有之候由申来候

事、

廿一日辛卯晴西風

一五ツ半過大阪川口出帆、平運丸乗船安行丸・小蝶丸・久留米燕氣船都合四艘

暮時分小豆島地藏岬へ碇泊、

廿二日壬辰陰東風

一六ツ半過出帆、四ツ時分器械損シ候ニ付小蝶丸ニテ引セ、備後尾之道ノ内糸崎へ暮前着碇泊、

四月廿三日癸巳晴晚雨

一六ツ半時分出帆小蝶丸ニテ引セ、四ツ時分芸州御手洗へ着、久留米船へ乗替九ツ過同所出帆、七ツ時分子州高浜へ着碇泊、

廿四日甲午陰昼過雨

一六ツ過高浜出船、九ツ半過同国宇和島領二窓へ碇泊、

廿五日乙未晴

一岡津トモ云

一五ツ過出船、四ツ半時分佐賀之関碇泊、

廿六日丙申雨

一晚七ツ過佐賀関出船、昼九ツ半時分日州細島着船滞留候事、尤平運丸着船迄ハ滞在無之候テハ人数且行列道具モ不相揃故也、

廿七日丁酉雨

一細島滞在、

廿八日戊戌微雨

一細島滞在之事、

廿九日己亥陰微雨

一今日モ同断、

一側向残人数小蝶丸ヨリ着船ノ事、

大 五月朔日庚子陰

一今日同断、

一外道具積方トシテ小蝶丸再佐賀之関へ出帆之事、

一今夜平運丸着船之事、

但安行丸ハ昼着、小蝶丸モ平運丸八時ニ着、

二日辛丑晴風吹 芒種五月節暮六時八分

一九ツ時分細島立、美々津休、津野へ七ツ半過着、止宿之事、

三日壬寅晴 入梅

一六ツ過津野立、高鍋休、八ツ過佐土原へ着、止宿之事、

一淡路守嫡子又之進元服、(島津忠亮)頻ニ願ニ付最早年輩モ相過候

間、旅中故可也之所ニテ理髮、川上式部ニテ元服有之

候事、

一七ツ時分ヨリ於奥(島津忠徹夫人)隨真院様初テ御面会、吸物酒肴等出候事、

一暁七ツ半時蒲生立、吉野庄屋所休ニ而、九ツ時二丸へ着式例之通、安心之事、

一蒸気船四艘共今日細島出帆之由ニ相見得候事、

五月四日癸卯晴

一今朝五ツ時佐土原立掛隨真院様御隠宅へ暫時立寄、本城昼休ニ而八ツ過高岡へ着、馬乗等見物イタシ候事、

五日甲辰朝雨後陰時々細雨

一六ツ前高岡立、吉川休ニテ七ツ半時分都之城着、今夜止宿、

六日乙巳晴

一六ツ半時都之城立、福山休ニテ八ツ半時分国分着泊、

七日丙午朝雨昼過晴、

一五ツ時国府立、加治木休ニテ八ツ過蒲生着、今夜泊之事、

一加治木休へ修理大夫殿迎トシテ蒸気船ヨリ被參居、暫時面会之事、

八日丁未晴

鹿児島県史料編さん関係者

顧問

国立国会図書館
客員調査員

大久保利謙

前早稲田大学教授

竹内理三

東京大学
史料編纂所所長

益田宗三

委員

桃園恵真 四本健光
田島秀隆 芳本即正
五味克夫 桑波田興
原口哲哉 安藤保
晋 泉

館長

井之口恒雄

副館長
調査史料課長

藤武三郎

島中 杉
尾口義男 徳永喜
荒田邦子 伊集院祐子
出田智子 長嶺泉子
森田恭子 山森理香

鹿 児 島 県 史 料

五里島津家史料 二

平成 4 年 12 月 1 日 印 刷

非 売 品

平成 5 年 1 月 22 日 発 行

編 集 鹿 児 島 県 歴 史 資 料 セ ン タ ー 黎 明 館

発 行 鹿 児 島 県

印刷所 合名会社 文尚堂印刷所

〒892 鹿 児 島 市 西 千 石 町 1 - 8
